

婚約破棄するはずが、エリート建築士の
甘い罠に搦めとられました

繁華街から少し離れた町の、民家と民家の間に挟まれた木造の一軒家。

一見すると少し趣のある古い家には、よく見るとドアの横にCOFFEEと書かれた小さな看板が掛かっている。

白とダークブラウンを基調とした落ち着いた店内では、マスターがハンドドリップでコーヒーを淹れており、流れているのはジャズ。

外とドアを一枚隔てただけなのに、この空間では時間がゆっくり流れているような気がする。ここは、小さな隠れ家のようなカフェである。

コーヒーはもちろん、昼食時にはパスタやドリアなどのランチも提供する。オープンしてから三十年は経っているのに、地域にすっかり定着したこの店は地元の人気店だ。

窓の外に目を向けると、小さい庭に植えられた木の緑が太陽光を通して透けて見える。それを見ながら淹れ立てのコーヒーを飲むのが、今の私にとって最高に贅沢な時間なのだ。

「美味しい〜」

仕事を忘れて淹れ立てのコーヒーにうつとりしていると、この店の二代目オーナーでもあるマスターが隣で苦笑していた。

「泉井さん、仕事忘れてない？」

「すみません。つい」

店自体は開店前。でも私はれっきとした勤務中だ。

「今日は……そうだな、グアテマラがおすすめかな。浅煎りでちょっと酸味があつて、香りがほんのりフルーティだから女性が好きそうだねえ」

今は朝のミーティング中。この店ではその日のおすすめを当日朝、実際に試飲して決める。新しい豆が入った時は、全部の豆を焙煎して試飲して、店独自のブレンドを作る。

マスターは五十代後半の男性。父親から受け継いだ店を経営する優しいマスターが淹れるコーヒーは、格別の美味しさだ。

マスターは、どうしてもこの店で働きたかった私を、数分の面接で即決採用してくれた。後からその理由を聞くと、「雇ってくれと訴えるオーラがものすごかったから」だそうだ。

そう言われてしまうと少し恥ずかしいけれど、私にもものつびきならない事情があつたのだ。

私、泉井千紗——二十九歳——は、新卒で入った会社を辞め、この店に転職した。

転職した大きな理由は、上司からのパワハラ。

コンプライアンスが重視される昨今でも、私の勤務していた会社ではパワハラに遭う人が後を絶

たなかった。一人、どんなに注意されてもパワハラ気質が直らない上司がいたせいだ。

数年間は何事もなく平和に過ごしていた。気になる先輩社員もいて、あの会社での仕事はそれなりに楽しかった。

でも私の後輩をパワハラで休職寸前まで追い込んだその上司に我慢できず、本人を直接咎めた。

するとそれ以来、今度は私がパワハラの標的になってしまったのだ。

『口ばつか達者でも仕事ができねえと意味ねえなあ!!』

自分の仕事はしっかりこなしていたのに、予定外の仕事を振られたり、大事な連絡をしてもらえなかったりということが何度も続いた。そして私がミスをする、その上司はここぞとばかりに嫌みを言いながら私を睨みつけるのだ。

数回は我慢したし、気にしないようにした。でも、何度も繰り返されると自然に体の方が参ってきて、生理が止まってしまったり胃の調子が悪くなってしまう、だんだん健康状態が不安になってきた。

もちろん他の上司や同僚に相談はしていた。でも、そのパワハラをする上司が人事部長の腰巾着だったせいで、何度訴えても嚴重注意だけで部署異動も左遷もなかった。

パワハラをやめる気のない上司本人にも、そんな上司が堂々とのさばり続けている職場環境にも限界がきて、私は三十歳を前にして転職を決意した。

というのがつい一ヶ月ほど前の話。

わりと大手のお菓子メーカーの人事部でスキルを積んだ私が、なぜこのカフェを次の職場に選んだのか。

それは多分、とにかく癒やされたくて仕方なかったから……かもしれない。

求人情報で見つけたこの店を、何気なくチェックしに訪れた時、店の持つ癒やしの雰囲気を持ち持っていた。

——いい。ここ、いい。私、ここで働きたい……!!

ここで働けば、傷ついた心が癒やされそう。そう確信した私がこの店に飛び込み、勢いのままに働かせてくれと訴えた時のマスターの顔は、今思えばなかなかの见ものだった。

私の勢いに圧され、『えっ、ええ？　ありがたいけどいきなり!?』と怯んでいたマスターを思い出すと、今でも笑いが込み上げてくる。

そういった経緯でこの店で働き始め、ようやく三週間程の私は、毎日店で提供するメニューを作る練習と、美味しいコーヒーを淹れるための特訓中なのである。

「紙フィルターでコーヒーを淹れるのにはだいぶ慣れてきましたけど、まだまだマスターの味には辿り着けないです」

お湯の注ぎ方も温度も蒸らし時間もすべてマスターと同じにしている。でも、自分が淹れるコーヒーと、マスターの淹れたコーヒーの味はまったく違うのだ。

「まあ、そこら辺は経験とかいろいろ？　その日の温度や豆の状態で蒸らし時間を変えるとか、技

が必要なんだよ」

あはは、と笑いながら店の開店準備を進めているマスターを見て、深く納得する。

やはり長年やってる人の味に、三週間程度で近づけるなんて思っちゃいけないな。

「勉強になります」

店の開店時間が近づいてきたので、コーヒーを淹れる練習は一旦終了。開店準備を済ませた私は、オープンの際をドアに掛けて店を開けた。

「は、疲れた……」

時刻は夕方。仕事を終えて帰路に就くと、決まってこの言葉が口から漏れる。

これまで事務職だったこともあり、最初は立ち仕事になかなか慣れなかった。

とにかく足は痛いし、帰宅すると何もする気が起きず、しばらくベッドに突っ伏してあやうくそのまま寝落ちそうになったことも一度や二度じゃない。

でも、そろそろ立ち仕事に体が慣れてきて、帰宅途中に買い物をする元気も出てきた。

——そう慣れよ、慣れ。こういうことは時間が経てばきつとなんとかなるものよ。

一人暮らしの身なので、夕飯に何を食べるかは自由。最寄りのスーパーで適当に何か買い込んで夕食にしよう……と考えている時。肩から下げているバッグの中で、スマホが震えた。

画面を見れば、メッセージの発信元は母だ。内容は、【今夜時間あるなら実家に寄りなさい】

だった。

「なんで急に実家？」

今日は水曜日。勤務先の定休日が木曜なので、もしかしたらそれをわかったうえで、こんな連絡をしてきたのかもしれない。

何かあったのかも不安は生まれるが、時刻は夕食タイム。この時間に実家に行けば夕飯にありつけるかもしれない……という期待が生まれた。

「一食分浮くし、助かるわ」

実家までは職場のある駅から、電車を何回か乗り換え三十分くらいで行くことができる。実家までの最短ルートを考えながら、早速母に【今から帰る】と返事を送った。

この時の私は、母からどんな話が飛び出すのかなんて何も考えていなかった。ただ今日の食費が浮くことを能天気喜んでいた。

実家には今、両親と弟、妹が住んでいる。私は三人姉弟の一番上で、近くに実家があるのに家を出た理由はそこにある。

別に二人と仲が悪いわけじゃない。弟は現在二十五歳で会社員、妹は二十二歳で看護大学に通っている。

しかし私が家を出る前、当時まだ十代だった二人がしょっちゅう喧嘩をしたり、週に何度も友人

を家に呼び、部屋でキャッキヤと騒いでいる環境に耐えられなかった。

学生時代は引越すお金もないので我慢したけれど、就職したら絶対家を出てやる……と心に決めた、実際就職を機に家を出たのだ。

昔の騒がしかった我が家を思い出しながら、実家のドアを開けた。その途端、懐かしい我が家の匂いと、おそらく夕飯の味噌汁の香りがふわっと漂^{ただよ}ってきて、一気に帰ってきたことを実感する。

——懐^{なつ}かしい。一人暮らしに慣れちゃって今更戻ろうとは思わないけど。

「ただいまあ」

家上がり、真つ先に母がいるであろうキッチンに向かう。

母は夕方まで近所にある保険代理店で事務仕事をしている。一昔前まではセールスもしており、子ども三人の学費を稼ぐためにバリバリ働いていた。保険契約もかなり取って、一時期は売れっ子セールスだったらしい。

ちょうど夕食の準備をしていた母は、私の顔を見るなり「夕飯食べる？」と聞いてきたので、食べる食べる、とダイニングテーブルの席に着いた。

今夜のメニューはヒレカツがメイン。なかなか一人暮らしの身ではカツを揚げることもないので、とても良いタイミングで実家に来た。

「で、わざわざメッセージ送ってくるなんて、何かあったの？」

「あるわよ、大ありよ。あんた、同じ中学だった天方^{あまかた}さんちの世^{せい}くん覚えてるでしょ？」

母が私の前にヒレカツの載ったお皿を置いた。揚げたてのヒレカツに気を取られつつも、今母が口にした名前の主を思い出し、空中を見つめた。

「天方さんって……あの天方？ お金持ちの……」

「そう。その天方さん」

味噌汁の入ったお椀を私の前に置き、母が頷く。

今母が口にしたのは、私が中学生の時のクラスメイトである天方世。彼のお父様が実業家で、某通信事業の会社を立ち上げたところ、それが軌道に乗り現在全国でもその名を知らない者はいないほどの大企業に成長した。

故に、天方世は世間で言うところの御曹司なのである。

父は公務員で母は保険のセールスという、ごく普通な我が家とは一見接点がなさそうな天方家であるが、そこは地元が同じということで接点がある。中学生の時PTAと一緒にやった関係で母同士が仲良しなのだ。

でもそれは私や世が中学生の時の話で、卒業後はさほど付き合いがあるとは聞いていないのだが。「なんで急に天方さん？ だってお母さん、天方さんと親交があったのって私が中学の時だけじゃないの？」

「そんなことないわよ。天方さん、うちの代理店で保険契約してくれたりしてたし、たまに連絡取り合っけランチしたりしてるわよ。まあ、確かにここ数年は私もセールスから離れたり、あち

ちも身内の介護やらで忙しくてあんまり会えてなかったんだけど、ちょっと前にスーパーでばったり会ってね。久しぶりだから話が弾んじゃって、買い物の帰りに喫茶店に寄って二時間もお喋りしちゃったわ」

「そうですか……」

きやつきやしている母を見て楽しそうでいいわね、と心の中で呟いた。

「天方さんってお金持ちなのにすつごく気さくで、偉ぶってなくてね。何年経っても全然変わりのの。ほんと、いい人なのよ」

「へ〜」

早速夕食を食べながら、何の気なしに相づちを打つ。

「それで、天方さんとお互いの子どもの話になって。あちらの世くんもまだ独身で、結婚の予定どころか恋人もいないんですって」

母もダイニングテーブルの席に着き、お茶を淹れてくれた。

「へえ……。世もそんな感じなんだ。なんか親近感湧いちゃうね」

暢気にこんなことを言ってお茶を飲む私に、母がため息をついた。

「世くんは今、大手ゼネコンで一級建築士をしてるんですって。お父様の会社を継げば苦勞しなくて済みそうなのに、自分で望んで今の職を選んだんですって。敢えて親の敷いたレールから外れるってすごいと思うのよね、並々ならぬ決意と努力が必要なもの」

「ふーん。すごいね。まあ、世は昔からずば抜けて頭も良かったし。ルールに乗らなくてもやっていける実力があるってことよね」

世とは中学の三年間同じクラスで過ごしただけ。特別仲が良かったわけじゃない。でも席が隣同士になったこともあるし、同じ委員会だったこともある。掃除の班も一緒だった。

——あっちが『あまかた』で私が『いずい』だから名前順で班が決まっただけなんだけど。

「それに世くんの写真……あ、天方さんの奥さんのスマホに入ってたやつなんだけど、見せてもらったら世くんってすごくイケメンなのね？」

「……ん？ ああ、そうかも。綺麗な顔してた」

中学の時の世は身長があまり高くなって、百五十五センチの私と目線がそう変わらなかった。だから私の中の世の印象は、顔が綺麗な男の子、という感じ。

でもたしか、中学三年の後半辺りからぐんぐん身長が伸び出して、卒業の頃にはだいぶ大きくなっていたように記憶している。

きっと私がイメージしている世と今の世は違うんだろうな、などとぼんやり考える。

しかし、今夜の母はやけに世を持ち上げることばかり言う。それに、そもそも私を実家に呼んだ理由はなんなのだ。こんな話がしたいなら電話やメッセージのやりとりでじゅうぶんな気がする。疑問を抱き始めた私に気がついたのか、母がついに本題に入った。

「そこで千紗。あなた、世くんとお見合いしてみない？」

「……………え？」

急に言われてもすぐに理解が追いつかない。

母を見たままキョトンとしている私に、母が身を乗り出して畳みかける。

「だってね!? よくよく考えてみたら世くんってものすごい優良物件じゃない!? そんな人が未だに独身でいるのが奇跡よ!! それに天方さんなら結婚した後のお付き合いがしやすいしね、私が。奥さんも千紗だったらむしろこっちからお願ひしたいくらい! って言ってくださったのよ。そんなわけで……どうよ!!」

興奮する母の勢いに圧おされながら、やつのことで声を絞り出した。

「ど……っ、どうよ、じゃないよっ!! 急にそんなこと言われてもっ……困る!!」

途端に母が不満顔になる。

「なんで困るのよ。千紗、付き合っている人いないじゃない。それに彼氏がいたのなんか遙はるか昔だったような」

実際彼氏がいたのは大学時代の数週間だけという。それも相手が浮気して終わったという、苦い記憶だ。

「うるさいな、それは放つてよ! ていうかさあ……真剣な話、転職したばかりでそんな余裕ないって! やつとパワハラから逃れて穏やかな生活を過ごしているっていうのに……」

「それはそうなんだけど。でも、あなたも世くんもじき三十よ? こらで少しそういうこと考え

てもいいんじゃないかしらって母親は思うのよ。というわけで来週の日曜に世くんと会って、そこらへんに関して話してきなさい」

いきなり具体的な日程が出てきて、開いた口が塞がらない。

「ひっ……ひどっ……！！ 私の意見も聞かず勝手にセッティングするなんて！！」

「これぐらいいないと話が進まないでしょ。世君との結婚が嫌ならそのことを世くんと話し合ってください。私から奥さんには言いにくいし」

「話し合えて、私、中学卒業してから世に会ってないんだけど……」

「久しぶりに会って話せばいいでしょ。世君イケメンだし、きつとびっくりするわよー？ 私に言われなくても惚れちゃうかもね？ はーい、話は以上です」

母がずずず、と湯呑みでお茶を飲む。その姿があまりにも暢^{のん}気で、沸々と苛^{いら}立ちが込み上げてくる。

——ちよつと……いくらなんでも横暴じゃない？ 元同級生だからっていきなり会って話し合えとか……！！

「なんで勝手にそんなことするかな……初婚の平均年齢が上がってる昨今、別に三十前だからって急いで婚活しなくてもいいと思うけど。きつと世だつてそう思ってるよ」

食べる手は止めず、たらたらと不満を漏らしていると、湯呑みをテーブルに置いた母がため息をついた。

「そうかもしれないけどね。やつぱり、なんだかんだでいい人っていうのは早くお相手が見つかったらうでしょ？ 今はいいわよ、健康で仕事もバリバリできて結婚なんか考えなくても一人で生きていける。でもね、三十五を超えて四十手前になると、ぐつと体力も落ちる。人によつては病気になるって弱気になることもあるの。そんな時に結婚したいって思つて周りを見ても、いい人はすでに既婚者ばかりで独身者が見つからず、結局一人ぼっちで私は寂しいと思うのよね」

「うっ……やけに現実的な例え……！！」

実際に経験した人の言葉は重い。

すぐに結婚する気のない私でも、今は少々刺さるものがあつた。

「わ……わからないではないけど。でも、その相手を選ぶ権利は私にあるのよ。いくら世がいい男でも、お互いが結婚したいと思わなきゃ無理なんだから……」

そうだ。いくら親が結婚させようとしても、本人同士にその気がなければ意味のない話だ。

「ま……そうなんだけど。でも、天方さんの話だと世くんもまんざらじゃないっぽく……」

これはきつと母の作戦だ。

その手には乗らん！

「はい、ご馳走様でした！！」

夕飯を綺麗に食べ終え、両手を合わせた。

食べた皿をさつさと片付けてバッグを肩にかける。

「とりあえず約束の場所には行くけど、その先の進展は期待しないように」
帰ろうとする私を見て、母はやれやれという顔をする。

「世くんを困らせるようなことはしないでよ」
「わかってるって。じゃーね」

バイバイと手を振って、実家を後にした。

——しかし急に呼びつけてお見合いさせようとするのか。我が親ながらやるのが突然すぎる。
でもまあ、夕食は美味しかった。

満腹になった分、運動を兼ねて少し早足で最寄り駅に向かったのだった。

天方世とは、中学時代のための同級生である。

——久しぶりすぎて、顔とかの記憶がおぼろげなんだよね。

自分のアパートに戻った私は、数年ぶりに中学の卒業アルバムを引っ張り出してテーブルに広げた。

幼い自分を見るとどうもこそばゆく、なんとも言えないノスタルジックな気分になる。ページを捲るうちに、世を見つけた。

すらりとした少し細めの体型に、まだあどけなさが残る顔立ち。でも、顔自体は整っているし、首や手足が長いので体全体のバランスがいい。この頃からイケメンに育つ要素はあったわけだ。

でも残念ながら私は別の男子生徒のことが好きだった。

世のことは異性として特別好きではなかったけれど、クラスメイトとしては良い奴だったと記憶している。朝ばったり遭遇して挨拶したらちゃんと返してくれたし、頼みごとをして嫌な顔をされたこともない。

席が隣だった時は、世の足下に落ちた私の消しゴムを拾ってくれたことがあったな。

その後、世は学年でトップの成績だったこともあり、少し離れた場所にある私立の超絶名門高校に進学した。私は実家から電車で二駅くらいの場所にある公立高校だったので、卒業後世と会うことはなかった。

高校卒業後に一度だけ中学の時の同級会があった。その時、世の姿はなかったものの、彼の噂だけはちらちらと聞こえてきた。

彼は高校卒業後、偏差値トップクラスの国立大学に入学した。高校に入ってから身長が二十センチほど伸びて、バレンタインには大量のチョコレートをもらうくらい女性からの人気が高かった、のだという。

その話を聞いて、イケメンになったのか〜と、身長が伸びた彼を想像した……記憶はある。私知知っている彼の情報はそれくらいだ。

「世ねえ……。向こうだっていきなり私なんかとお見合いさせられていい迷惑よね」

現状、世が今結婚についてどう思っているかはわからないけど、私は転職したばかりだし、今は

新しい環境に慣れるため毎日必死だ。

別に恋愛や結婚をしたくないわけじゃないけれど、するなら今じゃない。もっと仕事に慣れてからじゃないと、相手とも真摯^{しんし}に向き合えない気がする。

元同級生というだけで親にお見合いしろって言われて、きつと彼だつて困っているはず。

——そうだ。きつとそうに違いない。

おそらく私達は協力し合える……はず。

卒業アルバムを閉じた私は、そう確信してまったく疑わなかった。

世との「お見合い」当日がやってきた。

特に気負うこともないので、普段通りの格好で母に指定された場所に向かった。

母達が勝手にお見合いの場所に決めたのは、ちよつとしたお祝い事にぴったりの地元の美味しい和食処だった。

全席個室で、所々に生け花をあしらった店内はししおどしなんかもある。私も昔、祖母の誕生日を祝う時にこの店に来たことがある。そんな場所だ。

しかし、個室なんかで世と二人きりになるのが非常に気まずい。こんなことならファミレスとか、シアトル系カフェとか、もつと気楽な場所での再会をお願いすれば良かった。

直前までまったく緊張していなかったのに、駅から歩いて店に到着した直後、急にドキドキして

きてしまった。

「天方様ですね。お席にご案内いたします」

天方のおば様が予約してくださったその席に向かう。店員さんが個室の襖^{ふすま}を開けた瞬間、男性の姿が見えた。その瞬間、思わずハッと息をのんでしまう。

——世、いるし！

いや、いていいんだけど。いいんだけど、やっぱり数年ぶりに会うと別人で、にわかに緊張してしまう。

席を立たなくても、なんとなく彼の身長が高いことはわかった。そして、昔から綺麗だったその顔は、十年以上経過し精悍^{せいこん}な顔へと進化を遂^とげていた。

結論、世は見事なイケメンに成長していたのである。

休日だからなのか、それともいつもこうなのかはわからないけれど、眉にかかると長い長めの前髪から覗く綺麗なアーモンドアイ。その視線が私の方に向いているのがこそばゆい。

「では、ただいまお料理お待ちいたします」

女性の店員さんがこの場から去ってしまった。襖^{ふすま}が閉まり、世と向かい合わせに座った私は、とりあえず頭を下げた。

「ご無沙汰します……」

「こちらこそ」

あつさりとした返事に、改めて世をじっくり見つめる。

私は普段よく着る淡い色のシャツワンピースという格好だけど、彼も休日仕様といったラフな私服。白い無地のTシャツに黒っぽい色合いのパンツという格好は、スタイルの良い彼にとってもよく似合っている。

「あの……おば様から聞いた？ 今日のこと……」

「もちろん。じゃなかったら来てないだろう」

「それもそうですね」

「……中学卒業して以来だね。元気そうで何よりです」

「そっちも。ていうか、泉井さんあんまり変わってないね」

世がクスツと笑った。

そうだ、そういえば世は中学時代、私のことを泉井さんと呼んでいたっけ。

私は周りが皆、世と呼び捨てにしていたので、それに倣^{なま}って彼を呼び捨てにしていた。

だけど、今目の前にいる立派に成人した世を、いきなり呼び捨てにしているものだろうか。

——正直、そんな勇気ない。

「天方君は……変わったね。主に身長が」

遠慮気味に彼を君付けで呼んだせいでだろうか。

世が可笑^{おか}しそうに口元に握りこぶしを当て、眦^{まじり}を下げた。

「中学の終わりくらいから急に伸びたからね。っていうか、泉井さん、昔俺のこと世って呼んでたよね。今さら君付けで呼ばれるのもなんか変な感じだし、昔みたいに呼び捨てでいいよ」

世の方からこう言ってくれたことにホツとした。

「ありがと。じゃあ……世って呼ぶね。私のことも泉井じゃなくて、千紗でいいよ」

「わかった」

クスクスとお互いに笑い合っていると、少しこの場の空気が和^{なご}んだ気がしてくる。さつきよりもだいぶ肩の力が抜けた。

お茶を飲んでいたらさつき席まで案内してくれた店員さんがやってきて、大量の料理を置いていった。どうも天方のおば様が予約時にランチのコースをお願いしてくれたらしい。しかも一番お値段が高い和牛のすき焼きコースを。

「こ……こんなにたくさん……食べきれるかな」

ずらりと並べられた料理を前におののいていると、目の前にいる世が箸^{はし}をとった。

「食べられるだけ食べたらいいよ。残ったら俺、食べるから」

「う、うん。わかった」

こういう気遣いもありがたい。安心して私も箸^{はし}を手にした。

サシのたくさん入った牛肉と割り下^{わりげ}の甘塩^{かんしん}つばさが見事に調和した、とても美味^{おい}しいすき焼きだった。お昼から味わえて幸せだ。

わー、お肉柔らかーい、美味^{おい}しいー。などと普通に食事を堪能していた私は、本来の目的を思い出してハツとなる。

——いやいや、普通にすぎ焼き食べてる場合じゃないでしょ!! まず一番大事なことを話し合わないでどうするの!!

食べる手を止め、一旦箸^{はし}を置いた。

「ごめん世。今日ここへ来た本来の目的を忘れてたわ」

世が顔を上げた。

「目的？」

「そう。このままだと私、世と婚約させられちゃうの。そんで下手すると、あれよあれよという間に結婚なんてことになりかねない」

「そうかもね。うちの母親もかなり千紗のこと推してたから」

淡々と言いながらお肉を口に運ぶ世。美味^{おい}しそうに食べるなあ、なんて思いつつ、私の口からはため息が漏れた。

「実は私、転職したてで、まったくもってそんな気がないの。前職とまったく違う職種だから覚えることがたくさんあるし、事務仕事から立ち仕事になったこともあって一日終わるとヘトヘト。家に帰ってそのまま寝落ちしたりしてるし、正直、今は結婚のことなんか考えられないわけよ」

「なるほど、それはそうだろうな」

世が頷いてくれた。それを見て、ぶわっと喜びが体から溢れてくる。

「わかってくれる!? 私からもこの話はなかったことになったって親に伝えておくから、世もおば様にご縁がなかったって上手く伝えてほしいの。理由は、心に決めた人がいるとか、今は仕事が恋人とか……」

勢い込んで話す私に、世は苦笑いしている。でも、困っているようには見えない。

なんだかこの状況を面白がっているようにも感じる。

「仕事が恋人って、それはちよつと無理があるかも。俺、いつも図面引いてるけど、あれが恋人とは思いたくない」

そうだった、世は大手のゼネコン勤務なんだつけ。

「う……、そこは、世が上手く言ってくれば。理由なんかいくらでもあるでしょ」

「ないことはないけど、難しいな。俺今、特別仲の良い女性いないし」

なんとも煮え切らない返事をする世に、一抹の不安が残る。

「そんなことないでしょ。世、見るからにモテそうだし」

世が可笑^{おか}しそうに、ハツと笑いを漏らした。

「モテないよ。千紗だって知ってるだろ、俺、あんまり社交的じゃないから」

「そうだったっけ……?」

言われてなんとなく思い出した。そういえば世って、自分から積極的に女の子に声をかけるタイ

プじゃなかった。

どっちかというと、休み時間はイヤホンで音楽を聴いていたり、親しい友人と静かに話をしていた気がする。

だけど今はもうあの頃の世じゃない。これだけの外見と肩書きを持つ世を、女性達が放っておくとは思えない。

「でも世、かつこいいし。さすがに、昔のままってことはないんじゃない……っていう気がするの」

さすがに久しぶりの再会で、こういうことを言うのは失礼かな。

「何それ。千紗から見た俺ってかつこいいんだ？」

彼がクスツとする。

その表情の艶^{つや}つぽさに一瞬見とれそうになったけど、なんとか堪^{こら}えた。

「……と、とにかく、お願いします！ 私、本当にまだ結婚したくないから」

「なんでそんなに結婚したくないの？」

世に真顔で質問されて、思わず視線を落とした。

「……私さ、前職でパワハラに遭って。それがきっかけで転職したの」

あんまりこういう場で言いたくなかったけど、仕方ない。正直に話したら、世の表情も神妙になった。

「そうか。それは大変だったな」

「当時は大変だったけど、辞めてスッキリしたからそこはいいんだ。でも、新しい職場に早く慣れなくて、今はそのことしか考えられないの。せつかく雇ってもらえたんだから一日でも早く職場の戦力になりたいくて」

「それはいいことだね。向こうだってこんなに頑張ってくれるなら、ありがたいと思ってるんじゃないかな」

世が肯定してくれたのが嬉しい。

胸が躍りかけるけれど、そこはグツと堪^{こら}えて話を続けた。

「一応母にもそれは伝えたんだけど、年齢のこともあるってあんまり汲み取ってもらえないっていうか……。もちろん私がいつまでも一人でいるのが心配だっていう、母の気持ちもわかるんだけどね」

「それは俺も立場が一緒だから、よくわかる」

世にクスツとされると、私まで顔が緩む。

「パワハラに遭ってる時はもう毎日が辛くて、一日でも早く仕事を辞めたかったの。でも、今の仕事に就いてからは毎日が楽しいし、前職で傷ついた分を取り返すためにも頑張ってるって働こうっていう気になってるところなの」

「そうか。そういう事情があるなら結婚したくないってのも仕方ないか」

「本当にわかってくれた……？」

おずおず聞き返すも、世は私をちらっと見ただけですぐ手元に視線を戻してしまった。

「もちろん」

話もそこそこにパクパクと食事の手を進める世に、本当に大丈夫だろうか……という気がしてならない。

でも私の気持ちははつきり伝えた。さすがに嫌がついているのに、無理矢理話を進めるってことはないだろう。

「じゃ、そういうことで、よろしく」

言うべきことはすべて彼に伝えたので、また箸を持った。

せっかくこんな美味しい料理が目の前にあるのだ、食べないという手はない。

「さっき食べられないかもって言ってたのに、いけるんだ？」

「だって美味しいんだもの。その分夕飯減らすからいいの」

まだ残っていたお肉を鍋に入れたら、私を見て世がクスクス笑った。目尻が下がったその笑顔が、中学時代の世とあまり変わっていないくて、なんだか私まで笑えてきた。

——十年以上会ってなかったけど、こうしてみると昔の面影めちゃくちゃある。

まさか世とこんな形で再会するとは思わなかった。

数年ぶりの旧友との再会は予想していたよりもだいぶ楽しかった。過去を知っているせいか、お

互い気楽で会話も弾んだ。

母から聞いていた通り世はゼネコン勤務で、主にビルとかマンションとか、そういったものの設計に関わっているらしい。

「へえ。でもさ、世って天方家の長男でしょ？ お父さんの会社を継がないの？」

「うーん、どうだろう。どうしてもって言われたら考えないこともないけど、今はまだこの仕事が好きだから。それに今時世襲っていうのもね。能力のある人が経営に関わればいいと思ってる」

「経営に興味ないの？」

「今はね」

ふーん、と心の中で思う。

御曹司といっても、世はあまりガツガツしていないタイプなのかもしれない。

「千紗はどうなの。転職したばかりってさつきも言ってたけど」

「うん。前は事務職で今はサービス業だから、最初は体が慣れなくて大変だった。でも、前職が精神的にキツイ職場だったから今は天国よ。体の疲れは寝れば回復するけど、精神的な疲れは寝たって回復しないんだもん」

「わかるような気がする」

「でしょ……」

今ここで世に前職でのあれこれ話してもいいけど、あまり楽しい話じゃないので、詳細は控

えた。

「だから今の職場が楽しいの。店の雰囲気もいいしね。仕事はまだ覚えている途中だから大変だけど、やりがいはあるよ」

「そっか。良かったな」

はい……と返事したあと、ふと口を閉じた。

——こんなプライベートなこと聞かされても、世は困るよね……

縁談を断りに来たはずなのに、結構いろんなこと喋っちゃったなあと反省する。

あとは共通の友人の話題などで繋ぎ、食事は終了となった。さすがに完食とはいかなかったが、宣言通り、世が残さず食べてくれた。

「すごい。世、本当に全部食べたんだね」

「まあ、これくらいは……。一応男だし」

淡々と食後のお茶を飲んでいる世に、昼食分の代金を差し出した。

「これで足りるかな。私の分」

縁談を断るために協力をお願いした身なので、代金を払わないという選択はなかった。でも、テーブルに置かれたお札を見て、すぐに世がそれを私の方に突っ返してきた。

「いいよ。ここは俺が」

「だめだよ。そういうわけには……」

「いいから。千紗、一人暮らしだろ？ 俺は実家暮らしだし、千紗とは毎月かかる固定費が違うから気になくていい」

彼が実家暮らしと聞き、私の決意が揺らぐ。

「そうなんだ……。実家暮らしなのね。出たこともない？」

「数年前まで転勤で二年ほどこつちを離れてたんだ。またいつそうなるかわからないし、今も出張とかでちょこちょこ家空けるから、実家の方が楽だね」

「それはそうかもね」

確かに、世が勤務するゼネコンは大手で、支社の数も多い。そういう状況なら実家にいたほうが楽というのわかる。

「その点、千紗は偉いよ。大学卒業してからずっと一人暮らしだろ？ 頑張ってるじゃん」

「あ、ありがとうございます……」

意図せず褒められて、ちよつと嬉しくなった。

結局、世の厚意に甘えて食事代をご馳走になってしまった。ランチとしてはかなりの出費になったことが申し訳なくて、何度も世にお礼を言った。

「いいからそんなの。気にすんなって」

テーブルチェックを済ませた後、ぶっきらぼうにそう言い放ちながら財布をパンツのポケットにしまう世に、自然と笑みがこぼれた。

——世、いいやつ。お見合い話を断るのがちよつと勿体ないような気がしてくるわ。

私はまだ結婚する気がないけれど、こんな優良物件が未だ独り身で残っているのは、奇跡なんじゃないかとすら思えてくる。

周りの女性が世みたいな良い男性を放っておくとは思えないんだけどな。

店を出て、自然と世と向かい合った。

「あの……今日はありがとう。ご馳走様でした。あとくれぐれも、例の件よろしくお願いします」再度世に頭を下げると、ははっ、と声を出して笑われた。

「よろしく願いますって大げさ。まあ、どうにかなるだろう」

そうですね、どうにかなってほしいですね、と心の中で頷きながら、胸の前辺りで手をヒラヒラさせた。

「じゃね」

「じゃ」

とりあえず、このところ一番気がかりだったことが終わった。その結果、羽が生えたんじゃないかってくらい軽い足取りで駅に向かう私なのだった。

「て、ことが最近あつてね」

「へえ。なかなか大変な……」

「そうよ。同級生とお見合いとか、いきなりすぎてどうしようかと思ったわ。でも、話のわかる相手だったから。まあ、大事にならずに一段落かな」

転職してから初めての、友人との飲み会で、母親に仕組まれたお見合いの件を愚痴った。

どんな反応をされるかと思ったけど、意外にも友人は笑顔を絶やさな。

「でも、言うほど嫌そうな顔してないよね。実は結構楽しんでたんじゃないの？」

「まあ楽しかったけど、すぐく気を遣ったし。それに会う前なんかすつごくドキドキして、久しぶりの緊張感を味わったよ」

あははは、と友人が軽やかに笑う。彼女が手にしているのは黒ビール。それももうグラスに僅かしかない。

「でも良かったよ。ほんと、前職の時の千紗って、いつも顔が死んでたから。今はすつごく生き生きしてるし、目の輝きが全然違う」

「うん……。自分でも転職して良かったって心から思ってるよ」

すつかり良い気分になった私は、梅サワーを飲みながら、いかに前の自分が大変だったかを思い返していた。

ちなみに一緒に飲んでいる友人は相川ななみ。前職の同僚だった彼女は、私より一足早くあの会社を辞め、今は別の会社で働いている。彼女は、あの会社で起きた様々なことを共感できる貴重な存在なのだ。

お互いのアパートからちょうど中間地点にあたる駅近の居酒屋で、夕飯を兼ねた飲み会を始めてこれこれ二時間が経過した。店内はサラリーマンから女性のグループ、年配の人まで客層が幅広い。お酒の種類も多く、つまみも美味^{おい}いので私となみのいきつけど。

お互いにアルコールが強いため、前の会社の愚痴^{ぐち}を肴^{さかな}にガンガン酒がすすんでいる。

「この間、あの会社に残ってる子と連絡とったけど、アイツまだパワハラしてるらしくって。あれはもう直らないよね」

「今の人事部長がいる限りダメね。部長が退職でもすれば違ってくるかもしれないけど……」

梅サワーの中に入っている梅を潰しながら話す。

お互いに一口アルコールを口にしてから、そういえばとなみが話を変えた。

「北見^{きたみ}さん、昇進したらしいよ。今第一営業部で課長やつてるって」

馴染みのある名前が出てきたことに、少しだけドキッとした。でも動揺を見せないよう、努^{つと}めて平静を装う。

「ふーん……そうなんだ」

話を聞きながらサワーをマドラーでくるくる混ぜつつ、相づちを打った。

北見さんというのは、私達の三年先輩に当たる男性社員のこと。

彼は、私が前の職場に在籍中ちよつと親しくしていた人で、一時はこの人のことを好きになりそう……なんて思ったこともあった。

でも自分がパワハラの標的になって以来、社内恋愛する気持ちの余裕なんて、まったくなくなっ
てしまった。

それに、確かに北見さんはずっと私に優しくかった。元気のない私を気遣ってくれたし、相談にも乗ってくれた。でも、この人とは絶対に合わないと思う決定的な出来事があり、自然と距離をとるようになった。

その後すぐに私が離職することになり、彼ともそれきりというわけだ。

「結構仲良さそうだったのに、良かったの？ あの人まだ彼女いないらしいよ」

急に突っ込んだ話してきたので、飲んでいた梅サワーを嘔き出しそうになった。

「ちよつ……、そんなことまで聞いたの？ ……北見さんのことは、確かにちよつといいかもって思ってた時もあったけど、私とは合わないってわかったからもういいんだ」

となみが目をパチパチさせる。

「そうなんだ。なんだ……てつきり二人は付き合ってるのかと」

「違う違う!! でも北見さんには、このままあの会社で頑張ってもらいたいかな。それで、パワハラ野郎よりも出世してあいつを会社から追い出してほしいね」

そう言うのと、そっかそっか、となみが頷く。

「それよりもとなみはどうなのよ。転職先にいい人いたって前言ってたじゃない」

「あー、それ聞く？」

今まで平然としていたななみの顔が、少々曇った。

「何、もしかしてだめだった？」

「だめ……というか、私とは合わないかなあ、って感じ？ 見た目とかは好きなタイプだったんだけど、どうも亭主関白なタイプっぽくてさ」

「あらら」

ななみが黒ビールを一気飲みし、空いたグラスをテーブルに置いた。

「結婚したら奥さんには家にいてほしいとか、会社で堂々と云ってるの聞いちゃって。あー、これだめなタイプってなった。私、結婚してもずっと働いていたいから」

「そっか……ななみ、ずっとそう云ってたもんね。この年になると、どうしたって将来のことを考えちゃう」

空になったグラスを掲げ、ななみが通りかかった店員さんにおかわりを要求した。

「そりやそうよ。そんなの十代から二十代前半までじゃない？ あ、もちろん中には情熱だけで結婚する人もいるだろうから否定はしないけど、私はだめね。三十前にもなると、先のことをしっかり考えた上で決めたいから」

「だよね……わかる」

ななみに頷きつつも、私の中ではまだまだ先の話だな、という感覚だった。

せっかく嫌な職場から離れたことだし、今は心機一転、新しい職場でバリバリ働きたい。

マスターが美味しいと言ってくれるようなコーヒートを淹れられるようになったり、その日のお客様の好みで豆を選んでコーヒートを淹れ、美味しいと言ってもらえるようなバリスタになりたい。恋愛や結婚はその後考えればいい。

そんな思いを噛みしめながら、ななみとの酒盛りは時間が許す限り続いたのだった。

世との形ばかりのお見合いの数日後。

普段通りカフェで働いて休憩に入った私が何気なくスマホをチェックすると、母からのメッセージが入っていた。

——またお母さん？ 今度は何かな。また実家に寄れとか言うんじゃない……

恐る恐るメッセージを開いてみると、そこには予想外の文言が書かれていた。

【世君、好感触らしいじゃない？ 天方の奥さんから何卒よろしくって言われちゃった。じゃ、話進めとくからね】

「は!？」

驚きのあまり、休憩室の椅子に座っていた私は、無意識のうちにガタンと音を立てて立ち上がった。

——なんで!? 好感触ってどういう……世、あいつなんか余計な事言った!?

慌ててスマホをタップし、母に電話をかけた。

『はい』

数コールで電話に出た母の声は、落ち着いている。

「ねえ!! 話進めるってどういう……っていか、好感触ってなんなの!? 先方はなんて……」

『へ? だって、世君はいい話しかしなかったらしいわよ。世君がようやくその気になつてくれたって、あちらの奥さんもすごく喜んでらしてね? 私も嬉しいから、是非……って』

なんだって……!!

背中の中がひんやりした。

自分が意図していない方向に話が進んでいる恐怖つたらない。

「ちよっ……まっ……!! 私、本当に結婚とかまだ考えてないから!! 世にもちゃんと伝えたのに!!」

『ええ、でもあちらは、もう完全に結婚を前提としたお付き合いを始める流れよ? さすがに私、この状況でやっぱりお断りしますとは言えないわ』

「そんなっ!! お母さん友達なんでしょ!? なんとかしてよ!!」

『私にどうこう言う前に、世君でしょ。二人の間で何か行き違いがあったなら、もう一度彼と話しなさいよ。これは二人の問題なんだからね』

——それはそうなんだけど。ていうか、この前、世と話して決めたはずなんですけど!!

休憩室の壁に手をつき、思いきり項垂れた。同時に湧き上がるのは、世への怒りだ。

「~~~~つ、とりあえず、職場だから切るわ……」

『はい、頑張つてね』

脳天気な母の声を聞きながら通話を終えた。

そしてすぐに、電話帳のアプリから世の連絡先を開く。

何かあった時のためにと、念のためこの前会った時に彼と連絡先を交換しておいて本当に良かった。電話番号だけでもいい。

すぐ世に電話をかけた。仕事で出ないかな、と思っていただけ、意外にも彼はすぐ電話に出てくれた。

『はい』

「……世？ 千紗だけど……」

『うん、わかってる。どうした？』

さっきまで怒りが沸々と込み上げていたのに、世の優しい声音に怒りがしほみそうになる。

——いやいや、声聞いただけでしょんじやだめでしょ!!

「あつ……あの!! さっき母から連絡もらったんだけど、お見合いの話……そのまま進めたいってどういうこと？ 私、結婚する気ないって言つたよね!」

『ああ、その件ね。だとしたら俺も言いたいことがあるんだ。でも今仕事だし、時間を改めてゆっくり話したいんだけど、いい？』

「時間を……あらた……」

『今夜はどう？ 俺の仕事終わってからだから少し遅いけど、千紗の最寄りまで行くよ』

——今夜つて、そんなにすぐ!?

急な誘いにたじろぐが、この件はさっさと片付けたい。

「わかった……。それでいいよ。私のアパートのある最寄り……」

駅名を告げると、すぐに世が了解、と短く答えた。

『SMSにメッセージアプリのIDを送っておくから、登録して。次からはそつちでやりとりしよう』

「……わかった」

『じゃ、あとで』

プツツと通話が切れた途端、こっちはため息しか出なかった。

——なんか、怒りを吸収された感じ……

もやもやした気持ちを抱えたまま、休憩室に持ち込んだカフェオレを一気飲みして、店内に戻った。

「休憩、ありがとうございます……」

キッチンに戻ると、たまたま午後番の女性スタッフが出入り口前に立っていた。本来なら店に到着してすぐ休憩室に入るはずなのに、彼女がここにいるということは。

「あつ、杉山さんすみません!! もしかして私が電話してたせいで中に入れなかったんじゃない」

私が急いで頭を下げると、杉山さんという四十代の女性スタッフが大丈夫だよ、と笑ってくれた。彼女はこの店で十年以上働くベテラン社員さんだ。キッチンもホールもできる、頼れる大先輩なのである。

ちなみに私もこの店には正社員で採用されている。現在、店に勤務している人の中で正社員は四人。午前番が私ともう一人、午後番は杉山さんともう一人いる。マスターの奥さんと正社員がメインで調理を担当し、その他に短時間のパートさんや、夕方勤務の学生バイトさんもいる。

一軒家を改造したカフェで席数もそこそこあるので、これくらいの人数がいないとオーダーをさばききれないのだ。

ちなみにマスターの担当は、コーヒー豆を仕入れて焙煎^{ばいせん}し、オーダーに合わせてコーヒーを淹^いれること。マスターが焙煎する豆は評判がよく、ホテルや個人経営のカフェにも卸していて、その売り上げがこの店の経営を大きく支えているらしい。もちろん店頭にも豆が何種類も並んでいて、常連さんはコーヒーを飲みに来たついでによく購入している。

前職ほどではないけれど、業績によってボーナスも出るらしい。それがこの店に興味を持った理由の一つでもあった。

「ちよつと話し声が聞こえちゃって。結婚する気はないとかなんとか言ってたようかな？」

お客様から見えないキッチンの片隅で、こそつと耳打ちされた内容に、私の顔からポツと火が出そうになる。

「いやっ……！ それは、その……ちよつと今、お見合いのことで親とゴタゴタして……！ 自身はまだ結婚する気なんかないんですけど」

「泉井さん、まだ二十代だっけ？ そんなこと言っていると、すぐに三十だし、三十過ぎてからの一年はあつという間だからね？ チャンスがあるならその気がなくても結婚を考えてみるのもいいかもよ。のんびりしてたせいで気がつけば三十代後半で、慌てて相手を探し始めてる私みたいな人間もいるからね」

うふふ、と笑う杉山さんに、思わずおののく。

杉山さんは確か三十代後半で結婚し、それが初婚だったと聞いた。今は小学生のお子さんと旦那様との三人暮らしだそうだ。

「……三十代後半から相手を探すのって、大変でした？」

「大変よー!! 付き合ってる人もいなかったし、周りにはもう既婚者ばっかだし。運良く知り合いの紹介で今の旦那と出会えたけど、それがなかったら、未だに一人だったんじゃないかなって思う」

「そ、そうですか……」

「ま、なんでもいいけど後悔だけはしないようにね!」

そう言つて、杉山さんはロッカーがある休憩室に入つていった。

代わりにカウンターに戻った私は、退店したお客様の食器を片付ける。でも頭の片隅には、杉山さんに言われた言葉の数々があつた。

三十過ぎてから相手を探すのって、そんなに大変なのかな。

そりゃ、誰もが振り返るような絶世の美女とか、超社交的でお友達がたくさんいる人はそんなことないんだろうけど。

もやもやししながら片付けた食器を持ってカウンターに戻ると、食器棚のガラス戸に自分の姿が映った。特別美人でもない、ごくごく普通の顔立ちに、身長は百五十五センチで細すぎず太すぎずな体型。前職の時にストレスで激痩せし、今までにないくらいの体重になった……のだが、転職して一気に五キロ戻った。

それは食欲が元に戻ったせいもあるけれど、この職場の賄い^{まかな}が美味^{おい}しすぎてつい食べ過ぎちゃうからだ。

——このままいったらもつと太るかも……

そんな状態で三十代後半になった私は、杉山さんが言うように結婚相手が見つからなくて焦ったりするのだろうか。

せっかく今、こんなに充実した毎日を送っているのに、のんびりしてちゃだめなんだろうか。考えたところで、すぐに答えが出ないことを考えるのはやめにして、今は仕事に集中しよう。

夢中で仕事に没頭し、時々キッチンで調理の指導を受けたりなんかしているうちに、本日の業務は終了。片付けを終えた私は、午後番の社員さんとアルバイトさん数名に挨拶^{あいさつ}をして店を出た。

登録したメッセージアプリに世からメッセージが届いていて、時間と私の最寄り駅近くにある店

のURLが送られてきていた。

世が指定してきたのは大人なイタリアンバル。私のアパートの近くにある店で、何度も前を通っているけど行ったことはない。本当にここの!? と思わず目を疑った。

——外観からしてお洒落で敷居が高いイメージだったからなあ……

道路に面してガラス張りなので中の様子はわかるけど、ほんのり薄暗い店内はいつも若い人達で賑わ^{にぎ}っている印象だった。人数がいれば入れるけど、一人で入るのは躊躇^{ためら}ってしまう雰囲気のお店。けど、今夜は待ち合わせという大義名分がある。

いざ、とばかりに気合いを入れてドアを開けた。

夜の七時近くだけど、平日ということもあって店内にお客様の姿はまばら。それに世がボックス席を予約してくれたので、人の目を気にすることなく一人で席にいれることにホッとした。

——とりあえず……ビールでいいか。

オーダーを聞きに来てくれた若い男性店員さんにビールを頼んだ。こういう店だし、アルコールを飲んでいても問題ないだろう。

おしぼりで手を拭き、水を口にして肩の力を抜いた。

それにしても、どうして世はこの話を進めていい、というようなことをおば様に話したのだろう。このままだと本当に結婚する流れになってしまうのに、なぜ世はおば様に私の話したことをちゃんと伝えてくれなかったのか。

世だって、私と結婚させられるのは嫌だと思うんだけど。

心の中で盛大な疑問符を浮かべていると、ビールが運ばれてきた。ピルスナーグラスに注がれたビールは泡が滑らかで、口に含むとほんのり甘みがある。

「ん、美味し」

このあと待ち受けている世との話し合いを忘れて、お酒と食事を堪能したい……と思い始めたところで、店員さんに誘導されて世が姿を現した。この前の休日仕様の彼とは打って変わって、スーツ姿の世に男の色気を感じてドキッと心臓が跳ねた。

「待たせてごめん」

「あ……う、うん。たいして待ってないから。それより先に飲んじやった。ごめん」

「ん？ ああ、いいいいいよ。俺もビール飲もうかな」

ジャケットを脱ぎ、座席に置いてから座った世が、私と視線を合わせてくる。

「千紗、仕事帰り？」

「うん」

何の気なしに頷いただけなのに、世がすぐく申し訳なさそうな顔をした。

「遅くなってごめん、急いだんだけどこれが限界だった」

世が急いでくれたのはなんとなくわかる。軽く息が上がっていたし、走ったせいなのか髪も乱れている。

正直、そんなに急いでくれなくても良かったのに、と思った。

「全然いいって。むしろ世の方が忙しいのに、私の最寄りまで来させちゃってごめん」

「いや。俺の仕事は納期さえ守ればいいから大丈夫。千紗、食事はまだ？ だったらなんか食べながら話そう」

「うん、そうだね。お腹空いちゃった」

メニューを開き、お互いにこれがいい、あれがいいなんて言いながら、注文を決めた。

「お願いします」

世が通りかかった男性スタッフを呼び止めてくれた。二人でシェアして食べようと注文したのは、ワタリガニのトマトパスタとサーモンのクリームソースパスタ、バーニャカウダ。それと忘れちゃいけない、世のビール。

デザートも気になったけど、お腹の具合を見て後で決めることにした。

デザートが載っているメニューを一つ残し、注文を終えてから間もなくして、世のビールが運ばれてきた。ひとまず乾杯をする。

「ん、うま」

早速ビールを口に含んだ世が目を輝かせる。

「おいしいよね、そのビール。ぐいぐい進んじやう」

つられて私も一口飲む。……が、本来の目的を思い出して我に返った。

グラスをテーブルに置き、ぐつと身を乗り出した。

「……って、のんびりビール飲んでる場合じゃなかった!! 今日の昼間、母からこの間の話を進め
るって連絡あったんだけど、どういうこと!? 世、おば様になんて言ったのよ!?」

詰め寄る私をちらつと見た後、彼は一口ビールを口にする。

「先に言っておくけど、俺はちゃんと結婚の意思がないことを伝えた。でも、俺達を結婚させた
っていう母の気持ちが変わらないようだったから、作戦を変えたんだ」

「作戦を変えた……? どういうこと。ちよつと、意味わかんないんだけど……」

困惑する私に、世がグラスを置き、テーブルの上で腕を組んだ。

「いいか千紗。お前に今すぐ結婚する気がないのは、重々承知してる。俺だってまだ結婚は早いと
思ってるよ。でもな、この縁談を回避したからって、うちの母とお前んこのおばさんが、俺達の
結婚相手探しをやめると思っか」

まっすぐ目を見つめられながらの静かな問いに、私の思考が一時停止した。

「……えっ? そ……それは……」

言われてすぐ、母の姿を思い浮かべた。

娘の承諾も得ず、勝手にお見合いをセッティングするような母だ。この話がご破算になったとこ
ろで、娘の結婚を諦めるとは思えない。

きつと世もそのことに気がついたのだろう。恐る恐る彼の顔を窺^{うかが}うと、気持ちを通じ合うように

世が小さく頷いた。

「おそろくやめないと思う。すぐにまたお見合い相手を探し始めるはずだ。そうなった場合、お前
はまた、初対面の相手にこの話はなかったことにしてくれと頼み込むのか?」

「……そりゃ、まあ。私には結婚する気がないんだから、そうなるよね?」

世が静かにグラスを持ち、それを口に運んだ。長くて骨張った指が綺麗だなく、なんて暢^{のんき}気に見
つめている私に、世が決定的な一言を放つ。

「次も俺みたいにお前の提案に乗っかってくれる人ならいいよ。でも、必ずしもそういう男と巡^{めぐ}り
合う保証なんかない。お前の提案なんか吞まず、さっさと結婚にもっていかれたらどうするんだ?」

言われた瞬間、ガツンと頭を殴られたような衝撃を受けた。

——確かに世の言う通りだ。指摘されるまで気が付かなかったなんて……

「そ……そんなの困る……」

「だろ。だから、表向きは俺と結婚前提で付き合い始めたことにしておいたほうがいいんじゃない
かと作戦を変えた。だから母には、このまま進めてくれて構わないって話したんだ。状況について
理解できた?」

「……………理解は、できたけど……いやでも、ええ……」

頭がぐるぐるしてきた。

話を聞くと彼の言っていることが正しいように思えてくる。でも、それって本当に最善なのだろう

うか。

私が気付いていないだけで、実は別の策があるのでは……と思えてならない。

「でも、付き合ったことについて……それじゃ世だって困るでしょ？」

「いや、別に」

淡々と返される。

「だって、悪いよ。そんな……」

「気にするな。うちの親だって関与してるんだ、お互い様だ。それに一旦、結婚を前提として付き合っているフリをしておけば親も安心するだろ。折を見て、付き合ってみただけ価値観が合わないから別れたとか、適当に言えば親も納得する。世の中、付き合ったカップル全員がそのまま結婚するわけじゃないんだから」

「それはそう……だけど。本当にいいのかな……騙す^{だま}ようなこととして」

「いいんだよ」

確かに今、それが両方の母親を刺激せずに済むいちばん良い方法だとは思う。

でも、それって世間的には私と世が付き合っているという状況になる、ということ。

その事実を理解した途端、急に世を意識して顔が熱くなってきた。

「あの……。それって、フリだよな？ 本当に付き合うわけじゃないんだよね？」

「そうだけど、まったく何もないってわけにはいかないだろ。母親達も不審がるだろうし。それな

りに仲が良いアピールはした方がいいと思うけど」

「仲が良いアピール……!？」

——って、どこまで??

そんな私の考えを見透かすように、世が苦笑する。

「なんかいろいろ想像してるみたいだけど。普通にいいんだよ。一緒に出かけるとか、お互いの実家を行き来するとか適当で」

「あつ、そんな感じでいいのね……」

世のフォローにホッとする。

フリとはいえ付き合うってことは体の関係も入るのかなとか、キスはするのかなとか、余計なことばかり考えてしまった。

——だめだわ私、心が汚れてる……

自己嫌悪に陥りかけた時、ちょうど注文したバーニヤカウダが運ばれてきた。パプリカや芽キャベツ、ヤングコーンにニンジンとアスパラなど。たくさん温野菜とニンニクが利いたソースの香りが、私のテンションを上げる。

「わ、良い香り……」

「とりあえず、食べようか」

世に言われて、一旦話し合いを中断して、食事に集中することにした。

「ん。美味しい。野菜も美味しいけど、このソースが美味しい」

スティック状のニンジンにソースを付けてかじった。温められたニンジンは甘くて、何も付けずとも美味しく食べられる。さらにソースを付けると、ほど良い塩みとパンチのあるニンクのお陰で、もりもりと食が進む。

それは世も同じだったようで、彼も「美味しい」とだけ言葉を発し、ずっともりもりと野菜を食べ続けている。

「俺、バーニヤカウダって人生で二回目くらいなんだけど、これは美味しいね」

「これはって、前のは美味しくなかったの？」

「いや、それなりに美味かったんだけど、あんまり印象に残ってなくて。でもこれは美味しい。いくらでも食べる」

「わかる。パスタが来る前に食べ終えそうな勢いだね」

お互いにお腹が空いていたからなのか、あつという間に野菜が減っていく。

その状況を見て、なんだか笑ってしまった。

「食べるの早すぎでしょ。テーブルに来てからまだ五分くらいしか経ってないのに」

「仕方ないだろ。昼に食ったきり何も食べてなかったんだから、腹も減るよ」

セロリをばりばりかじりながら世が嘆く。

「何も食べてないの？ お菓子とかは？」

「一応午後三時くらいに短い休憩はあるんだけど、今日は早く上がりたから何も食べずに仕事してた」

「え、そうなんだ……なんか、ごめんね？」

「いや。俺もこの件について早く千紗と話したかったから。むしろ今日連絡くれて良かったよ」

「……それならいいんだけど」

そうこうする間にバーニヤカウダを食べ終えてしまった。おそらく三分の二は世が食べたと思うするとタイミングよく、パスタが二種類運ばれてきた。お互い好きな量を皿に取り、早速食べ始める。

サーモンのクリームパスタは、タリアテッレにソースがよく絡んでいてとても美味しかった。ワタリガニのトマトソースは、カニの出汁がトマトソースにコクを出しつつも、ほどよい酸味のおかげでさっぱりしていて食べやすい。おそらくパスタはスパゲッティで、こちらもソースがよく絡む。

「それにしても、世がまだ独身だったのには少し驚いたなあ」

パスタをフォークでくるくる巻きながら、何の気なしに思ったことを口にした。

「なんで？ 千紗だって独身だろ」

「そうだけど、私とはスペックが全然違うじゃない。いい大学出て、大企業に勤務してて、そんなモチそうな顔してたら絶対女性が放っておかないと思うのに」